

研究者のための+αシリーズ Vol.14

How to Develop Your Diplomacy as a Researcher—「研究者」と「外交」—

(2022年8月25日(木) 16:30~18:00 開催)

【Q&A集】

○事前にいただいたご質問に対する回答

【Q1】 海外の研究者との交流する上で、気をつけなければならないこと、研究する上で、文化による影響や障害になることがあれば、教えていただけないでしょうか。【大学院生、非常勤講師の方より】

ご質問を踏まえて、ご講演いただいております。アーカイブ動画をご覧ください。

【Q2】 日本人は空気を読もうとしますが、国際政治や外交など、「顔が見える相手との競争」というフィールドでは、実はこの能力がいきるのではないかと考えています。私個人は、社会科学の領域で「顔の見えない相手との闘い」について考えることが多いのですが、外交といってもフィールドは多様だと思しますので、どういう人がどんなフィールドで活用できそうか、お話が伺えたらと考えております。【URAの方より】

ご質問を踏まえて、ご講演いただいております。アーカイブ動画をご覧ください。

【Q3】 博士号取得後は海外でポストを探したいと思っております。そのチャンスを高めるために、博士後期課程で具体的に今から何をしていたらよいか、教えていただけないでしょうか。【大学院生の方より】

【A3】

- ▶ **狩野先生**：特に西欧文化では紹介の有無は重要です。チャンスを高めるためには、海外の有力な科学者に対して学会等の機会に質問したり、自分の仕事内容に意見をもらったりしてご自身のプレゼンスを高めていきましょう。そのような機会に、博士課程取得後は海外に行きたいことをアピールしておくことも一案です。院生のうちに短期でも海外に行く、オンラインで学会のコミュニティに参加し発言をして、継続的に自分を知ってもらおうといった努力も効果的です。また、若手研究者向けの海外派遣ファンドは増えています。申請できるものはできるだけ申請しておきましょう。
- ▶ **JST 国際部**：海外で研究する上で、共通言語は英語です。自分の専門を英語で語れること、プロポーザル書類をきちんとした英語で書けることは必須です。また、国際学会で積極的に自分をアピールしましょう。思わぬつながりができることもあります。

【Q4】 バイオ、微生物、遺伝子工学を学んでいる大学3年生です。夢は探検家のような研究者になることです。海外を飛び回る探検家のような研究者になるには、どのような力を身につけたらよいでしょうか。【大学生の方より】

【A4】

- **狩野先生**：一言で言うと「レジリエンス」です。国境を越えてあたりまえが違うことで出会う様々な困難を、「思い通りにならないことを、どうやって自分の幅を広げるために活用するか」という気持ちで、次につなげてどんどん進むパワーを身につけるとよいと思います。自分にとって居心地のよくない環境に身を置き、その中ででも役割を果たしたり、役割をもらえるようになる力を養うこともよいでしょう。すべては思い通りにはならないくらいの意識でそれを却って楽しめる心構えにしていきましょう。
- **JST 国際部**：海外で研究する上で、共通言語は英語です。自分の専門を英語で語れること、プロポーザル書類をきちんとした英語で書けることは必須です。また、国際学会で積極的に自分をアピールしましょう。思わぬつながりができることもあります。

【Q5】 子供がいて、妻もフルタイムで働いている中で、海外に打ち合わせ等に行くことに困難を感じます。しかし Zoom 等の打ち合わせだけでは、相手との関係性を構築するのがかなり難しい（一度現地で会って打ち合わせ等した後であれば容易です。）とも感じています。他の研究者は海外研究者との交流をどう工夫しているのか知りたく、ご存じでしたら教えていただけないでしょうか。【助教相当の方より】

【A5】

- **狩野先生**：ご自身が子連れで海外の仕事に行くことを検討されるのも一案と思います。もちろん一筋縄ではいかないことはわかっています。学会や大学で設置される託児室等の支援のありがたみを感じられ、そのような意識が社会の変革へとつながるかもしれません。もしくは、様々なサポートを活用してご自身もパートナーも負担を最小限にしつつ、パートナーと調整して出張をされるのもよいでしょう。それでも現地に行くことが難しいのであれば、オンラインであっても関係構築ができるだけの言語力やコミュニケーション能力を磨く努力をすることもあり得るかと思います。
- **JST 国際部**：確かにオンライン交流だけで、初対面の方と信頼関係を構築することは難しいでしょう。オンラインのうちは、オンラインで進められることを進め、対面で会える機会に備え、直接会った時に、それまでできなかったことをする等、メリハリをつけて関係を構築していったらよいの

ではないでしょうか。

【Q6】 コロナで国際学会がオンラインになり、海外の大学院に留学するためのコンタクトがより取りにくくなっていると感じています。一步を踏み出すまたはコネクションを作るには何をしたらよいでしょうか。【大学院生の方より】

【A6】

- **狩野先生：** 広くコネクションを作るためには、オンラインであっても学会に参加して、つながりたい相手を中心にしつつ広い範囲の方々に“筋のよい質問”をし、自分をアピールするとよいでしょう。“筋のいい質問”ができるようになるためには、とにかく質問をしてみることです。西欧的な文化圏では、いわば黙っていたら存在していないのと同じ。発言してこそあなた自身をアピールできます。昨今の世界は多くの地域でインターネット環境が整っています。コロナにより、オンラインでも個人コミュニケーションは取りやすくなっています。返事がなくても気にせず、どんどんコンタクトをとってみましょう。実際に留学するのであれば、自分の海外キャリアの戦略をしっかりと練ることも必要です。その戦略の下、既にコネクションを持つ国内の先生に、紹介をお願いするのも一案です。
- **JST 国際部：** 関心のある方にメールを送ったりして、まずは自分から能動的にアクションを起こし、働きかけてみましょう。

【Q7】 日本人はどのような国の人々と多く関わっている印象をお持ちでしょうか。【大学院生の方より】

【A7】

- **狩野先生：** 一般的には、海外で見かける日本人は日本人で固まっている印象はあります。せっかく国外にいるのですから、色々な方と交流してみたいです。日本人の留学先という観点では、現状は西欧が主流かもしれませんが、今後人口が増えて発展していく国と関わっておくと、将来の研究の発展性にはよいかもしれません。出来上がっている西欧の研究コミュニティに食い込むにはかなりの労力とスペックを求められますが、発展性のある地域であれば、外国人であるあなたの価値を認めてもらえる可能性もあるでしょう。
- **JST 国際部：** 研究者は、交流する相手を自分の研究の関心、興味、研究をどう進めていきたいか等で決めているのではないのでしょうか。ですので、ある特定の国籍の相手と多く関わるということもないかと思います。

○セミナー当日、狩野先生にお寄せいただいたご質問に対する回答

【Q8】(ご講演でご説明があった) 討議文的思考はどのように鍛えることができますでしょうか。

【A8】

- **狩野先生**：自分が伝えたい考えのポイントは何なのか、その根拠は何なのか、相手の言うこととどこが違い、どこが共通なのか、そうした内容を言葉にまとめる練習を母国語でも常日頃からしておくことだと思います。

【Q9】文学専攻です。海外の雑誌に論文が掲載されれば満足なのですが、その場合も海外の学会にも参加する必要があるでしょうか。

【A9】

- **狩野先生**：もちろん、無理に参加する必要はないと思います。しかし、査読付雑誌に論文が受理されるためには、査読する科学者に、論文で議論している内容の妥当性が認められなければなりません。それを踏まえると、文化・知識背景の異なる研究者が自分の説を受け入れるためにはどのような議論が必要かを知るために海外の学会に参加することは、意義のあることではと考えます。

【Q10】多様なチームを上手にリードするのに必要な素質は何でしょうか。

【A10】

- **狩野先生**：「聞く力」でしょうか。向かうべき方向に上手にチームを導いていくには、個々のチームメンバーの考えは理解した上で、それを踏まえて方向を説得していくことが大切だと思います。他方、似た素質も持つ人同士は自然と集まる、という傾向もあります。あまり無理しすぎず、自分の持っている素質のままで、自然とできていくつながりの輪を大事にしなが、進めていくのがよいと思います。

【Q11】新規性の高いものはお互いに距離の遠いもの同士を組み合わせることが重要とのことでしたが、こういった基準で距離の遠さを測ればよいですか。

【A11】

- **狩野先生**：Machado, D. (2021), OECD Science, Technology and Industry Working Papers, No. 2021/07, OECD Publishing, Paris, <https://doi.org/10.1787/675cbef6-en>. 内で方法について書いてある箇所をご参照ください。

【Q12】「同一性を優先する東洋」と「違いを優先する西洋」という異文化の違いを実感した具体的な体験などおありでしょうか。

【A12】

- **狩野先生：**自他の同一性を重視する文化圏と、自他の違いを重視する文化圏があり、その文化的価値観のどちらが優先されているか、そういう観点で国際情勢をみると、いろいろ気づきがあるでしょう。具体的な事例については、「木を見る西洋人 森を見る東洋人」（リチャード・E. ニスベット 著）にも紹介されていますので、お手に取ってみてください。

【Q13】 Eye opening など講演をありがとうございました。どうしてもわかり合えなさそうと挫けそうになる時どう自分を奮い起こしたらよいでしょうか。

【A13】

- **狩野先生：**相手もわかり合おうと努力してくれている場合もありますが、どんなに頑張っても無理な場合もあるでしょう。そんな時は、またの機会にと一旦諦めて、距離を置いてみるのも一案と思います。

【Q14】 国際的な異分野融合研究を国内の異分野融合研究と比較した場合の利点は何でしょうか。

【A14】

- **狩野先生：** 目的を共有し、違いを理解し合い、活かし合う気持ちさえあれば、国も専門も背景が違うほど面白いアイデアにつながると期待します。

【Q15】 東洋と西洋における議論に対する考え方の違いを認識しておくというお話がありました。具体的にどのように違い、対応など何か例をお話しいただけるとありがたいです。

【A15】

- **狩野先生：** 例として実験レポートを挙げてみます。時系列順に実験を書き連ねたレポートも日本ではよく見かけますが、これは用いる「作文の型」が合っていないと思います。科学でトレーニングしたいのは、結論が明示され、それを支持するデータと、手元のデータで証明しきれない部分を説明する作文の型です。つまり西洋的な議論に慣れるには、「何が言いたいことなのか」を先に明確にし、その理由は何か、と自分の考えをまとめる訓練です。特に科学では重要なトレーニングです。日々意識してみてください。母国語でこれができないと、英語ではもっと難しいでしょう。でもできるようになると英語で話す際にも、自分の考えをクリアに伝えられるようになると思います。

【Q16】 これまでこういった場面でご自身のユニークさに気づかされることがありましたか。

【A16】

- **狩野先生**：自分では当たり前と思う考えを話した時に、びっくりされたり、否定されたりした時でしょうか。そのような経験をした時に、自分の考えがユニークだったのかなと感じます。ですが、どんな他者とも全く違うということも、またあり得ないと思います。何は違って、何は同じなのかという問いはいつも有効だと思います。

○セミナー当日、JST 国際部にお寄せいただいたご質問に対する回答

SICORP に関するご質問は国際部のホームページに掲載いたします。
また、お問い合わせは、renewmap@jst.go.jp をお願いいたします。

【Q17】 JST 国際部で働くには、どのようなバックグラウンドが必要ですか。

【A17】

- **JST 国際部**：バックグラウンドに特段の決まりはありません。専門性も学歴も経歴も異なる多様な人材が働いています。JST は金銭的な利益を追求する組織ではないため、「人々の生活をよりよくしたい」、「社会のために役に立ちたい」といった「公共の利益」のためという気持ちがある方、そのような働くモチベーションをお持ちの方に、国際部はもちろん、JST で働いていただきたいと思っています。